

77
会報響き
日
ま

発行所 公益財団法人 聴覚障害者教育福祉協会
〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-43-11
福祉財団ビル5F

発行人 山東 昭子 編集人 櫻井 博
(題字 山東昭子会長)

TEL 03-69900725
FAX 03-69900725
1537

第四十二回聴覚障害児を育てた

お母さんをたたえる会

令和二年一月二十七日(月) 憲政記念館において、第四十二回聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会を開催いたしました。今回は全国都道府県より推薦された五十二名のお母さんが、表彰されました。ご家族と共に来場して表彰を受けられたお母さん方は二十七名でした。

今回は佳子内親王殿下に平成二十六年以来二度目の、そしてお一人では初めての臨席を賜りました。開会式の中で佳子内親王殿下のお言葉を賜りました。また、式典後には、内親王殿下と被表彰者などで懇談が行われ、その後表彰されたお母さん方やその他の被表彰者、そのご家族の方とで記念撮影が行われました。

降雪が心配された天候の中、滞りなく実施することができました。例年通り多くのボランティアの皆さんに支えられ、励ましと感謝の気持ちに溢れた行事として開催できました。有難うございました。



第42回
聴覚障害児を育てた
お母さんをたたえる会

山東会長の式辞



お言葉を述べられる
佳子内親王殿下

佳子内親王殿下のお言葉

このたび、「第四十二回聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会」に出席し、全国からお集まりの皆さんとお会いできましたことを、大変嬉しく思います。

本日は、最初に、聴覚に障害のあるお子さまを育てられたお母さま方への表彰がございました。この表彰は昭和五十三年から続いています。受賞されるお母さま方は、きっと、それぞれに、大変なことも嬉しいこともある中で、お子さまに寄り添い続けてこられたことでしょう。そして、お子さまが安心して成長できるよう、心を配り、工夫を重ねられたことと思います。お母さまとともに過ごした時間は、これからも、お子さまの心を支え続けるのではないのでしょうか。長年にわたるご努力に心から敬意を表します。

続いて、著しい社会貢献をされた聴覚障害者への表彰がございました。今回受賞される方は、地域の聴覚障害者の生涯を支える取り組みに携わってこられました。また、聾学校の教育にかかわる助言もしておられます。市役所に勤務されながら、ろう者劇団を創設されたと

いう経歴をお持ちです。幅広いご活躍を、心強く思います。

最後に表彰されるのは、「第十五回全国聾学校作文コンクール」の金賞受賞者です。今年も、多くの小学生、中学生、高校生から、経験したことや考えたことを自分の言葉で表現した文章が寄せられました。私も作品を読ませていただきました。作者の思いを感じる、心に残る作文でした。

本日表彰を受けられる皆様、おめでとうございます。受賞者のご家族も、受賞者を支えてこられた方々も、共に喜んでいらつしやることでしよう。関係された皆様に、改めて心からお祝いを申し上げます。

結びに、この会の開催に尽力された方々に敬意を表しますとともに、この会が皆様にとって良い思い出になることを願い、私の挨拶といたします。

祝
辞

文部科学副大臣 亀岡 偉民



本日ここに、佳子内親王殿下の御臨席を仰ぎ、「第四十二回聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会」が開催されますことを心からお慶び申し上げます。

はじめに、本日受賞されます皆様に対し、心からお祝い申し上げます。また、聴覚障害のあるお子さんを支えてこられたお母様方、御家族の皆様方の、お

子様に対する深い愛情と御献身に對しまして、心から敬意を表します。文部科学省におきましては、子供たち一人一人の自立と社会参加を見据えて、その時点で教育的ニーズに最も的確に指導や支援を行うことができるよう、各種施策の充実に精力的に取り組んでいるところです。特に、難聴児への支援については、「難聴児の早期支援に向けた保健・医療・福祉・教育の連携プロジェクト」を文部科学省と厚生労働省が共同で立ち上げ、昨年六月に報告を取りまとめました。来年度予算案におきましても、聴覚障害に係る教育相談

の実践の蓄積や、教育相談の実施体制の構築など、本報告を具体化するために必要な経費を新たに計上しました。その他にも、障害のある方々が、その一生涯を通じて、自らの可能性を追求できる環境を整え、地域の一員として豊かな人生を送ることができるよう、共生社会の実現に向けて、省を挙げて取り組んでおります。御参会の皆様方におかれましては、引き続き、当省の取組に御理解、御支援を賜りますようお願いいたします。

結びに、この意義深い表彰事業を実施されておられます公益財団法人聴覚障害者教育福祉協会の一層の御発展と、本日御参会の皆様方のますますの御健勝と御活躍を祈念し、お祝いの言葉といたします。

祝 辞

厚生労働省障害保健福祉部長 橋本 泰宏



本日、ここに佳子内親王殿下の御臨席を仰ぎ、公益財団法人聴覚障害者教育福祉協会が主催される「第四十二回聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会」が開催されるに当たり、一言お祝いを申し上げます。

はじめに、本日表彰を受けられる方々に対し、心からお祝い申し上げます。また、聴覚障害のあるお子さんを日々支えてこられたお母様やご家族の皆様は、心から敬意を表します。この「たたえる会」は40年を超える長きに渡り開催されてきております。本会を通じて、お母様方がお子さんの成長に寄り添うことを応援するとともに、聴覚障害のある方々の教育や福祉について、幅広く国民の理解が深まっていくことを期待しています。厚生労働省では、近年、様々な制度改正を行い、障害のある方々の支援の充実に取り組んでおります。また、令和2年度予算案においては、地域における聴覚障害児の支援体制を構築し、切れ目のない支援を提供する「聴覚障害児支援中核機能モデル事業」を新たに創設することとし、難聴児とその

の家族の支援の一層の充実を図ってまいります。その他にも、意思疎通支援事業において、手話通訳者や要約筆記者などの意思疎通をサポートする人材の派遣や養成に取り組んでおります。現在、第2期障害児福祉計画に向けた見直しの議論を行っており、地域における障害児の支援体制が一層充実されるよう取り組んでまいります。さらに、第4次障害者基本計画においても、聴覚に障害のある方が一人で電話を掛けるための手話通訳や文字通訳に対応するオペレーターを配置する電話リレーサービスの提供体制の充実を図ることとしております。電話リレーサービスにつきましては、現在、公共インフラとしての電話リレーサービスの実現に向けて議論を重ねており、皆様にとって使いやすい制度となるよう、丁寧な検討を行ってまいります。今後とも、関係する皆様の御意見を十分にお伺いしながら、聴覚障害のある方々への情報支援やコミュニケーション支援等の充実に取り組んでいきたいと考えています。引き続き、御理解と御協力をいただきますよう、よろしくお願いいたします。

結びに、この度表彰を受けられました皆様の今後の一層の御活躍と、山東昭子会長をはじめとする聴覚障害者教育福祉協会の皆様の益々の御発展を祈念し、お祝いの言葉といたします。

〇〇お母さんの体験発表〇〇

「こどもの自立と社会のバリア」

北海道 鈴木真弓

北海道札幌市からまいりました、鈴木真弓です。このような機会を与えて下さったたくさんの皆様に感謝いたします。

今日は「子どもの自立と社会のバリア」をテーマに十九歳の長男を中心に家族と私の体験をお話しさせていただきます。長男にとっての「自己実現」「自立」ってなんだろう。長男にとっての「社会のバリア」はなんなのだろう。長男の目線で、私の目線で、私の家族を切り口にお話しさせていただきます。まず、聴覚に障がいを持った子を授かった母親の目線でお話しさせ

てください。

長男は、千歳で誕生しました。出産一日目の朝、大聖病院のお掃除の方が、「大きくてよかったね!」と声をかけて下さったのは衝撃でしたが「そうなんだあ」と疲れと混乱のぼんやりとした意識の中で眠ってしまった誕生日を思い出します。

長男の妊娠時に私の血液の病気がわかりました。母子の健康を守るため妊娠当初から出産は二千五百gに育ったら産みましょうと医師より伝えられていました。医療に守られた中でしたが千歳はさすがに想定外です。私は保健師でたくさんの子どもたちの健診や家庭訪問を通して支援してきました。出産直後から合併症は避けられないと覚悟を決めていました。「大きくてよかったね!」のひとつが私の



お母さんの体験発表

樂觀的な性格を後押ししてくれたのかもしれない。「人と比べない、いいところを見つければ」と仕事を子育てに悩むお母さんに伝えていた言葉を自分に向けたのがこの瞬間でした。

まず、呼吸器、心臓などに命に係わるトラブルが生じた。退院後の生活にも支障をきたす可能性があるという説明を受けました。私が先に退院し、毎日のように母乳を搾乳して届けました。病院では一回の授乳量は三ccからスタートです。みるみる量が増え、哺乳瓶で飲めるようになり冷凍母乳もいつか足りなくなりミルクを足すほどになりました。長男は目指す二千五百gに到達し、呼吸器疾患等の不安をかかえながら退院できました。そして今は十九歳。私の家族の中で一番丈夫です。めったに風邪もひきません。

その後も様々な検査が行われる中、聴力に障がいがあることがわかりました。病院から札幌聾学校の幼稚園での相談を勧められ、乳幼児期からの専門的支援を勧められました。私も夫も仕事がありましたので子供に終始付き添えないため、いわゆる普通の認可保育園を選択しました。保育園でたくさんの子どもたちと遊び保育士さんに育ててもらった五年間は貴重な時間

だっただけです。

小学校からは札幌聾学校に通い、小樽にある高等聾学校でお世話になり、昨年福祉医療系の大学に入学しました。さて、「自立した生活をおくること」についてです。長男は、家での生活、学校生活、寄宿舎生活、地域の皆さんの支えの中で、「食べること、寝ること」「安心して暮らすこと」「集団の中での自分の役割を見つけること」というさまざまな欲求が育てられてきたと思います。

北海道には札幌、旭川、函館、室蘭、帯広の五か所に聾学校、釧路に釧路鶴野支援学校があります。北海道高等聾学校は小樽市銭函にあり、広い北海道に一所です。そこで、高等聾学校の入学イコールほぼ寄宿舎生活になります。長男も片道一時間半以上かかる通学は避け寄宿舎を選択しました。

長男が高等聾学校に通う頃、生活に変化が訪れます。私は市役所を退職し、先に夫が起業した勤め先に就労し、自由な時間ができました。そこで三年間、私はPTA会長を務めさせていただきました。北海道内外の聾学校、特別支援学級等の活動を知りたくさんのお母さんたちと出合い情報交流ができました。PTAの活動をとおして学校行事や学校の授業、寄宿舎での生活を過ごす子ども達の元気な笑顔を見て、長男の成長を感じた三年でした。このような体験ができたのは夫のおかげです。長男の小中学校時代、夫は市役所を退職し、送迎や病院受診に要する時間が得られやすいよう起業しました。PTA会長を務めた時期もあり、育児もPTAの取り組みも夫に任せきりでした。近くにあるとは限らない学校の送り迎えの共働き夫婦の就労はこれからは課題ではないかと思っています。

親から離れた寄宿舎の三年間で生活の中で「自分ができること」「できないこと」に気づき、さらに「できるけどやらなかったこと」にも気づきました。洗濯や掃除など親が手出しをしていたことです。また、「手助けしてもらいたいことを伝えること」にも気づいたと思います。長男は身体の障がいもあったため、階段の上り下り、長時間歩くこと、重い荷物を持つこと、手指（てゆび）のこまかな動作が苦手です。寄宿舎は一階の部屋に配慮していただき、入浴も寄宿舎の指導

員さんに介助してもらっていました。高校卒業のころ、部屋は三階になりました。脚力、体力がつかえました。今では重い荷物は長男が持つてくれます。三年間の心とからだの発育、発達に驚かされました。

「できる力」は存分に使い、「できない力」は手伝わしてもらった。ただし、ひとりひとりその力は様々で、その生徒にあった手伝い方があることを長男は寄宿舎生活で学び、私は長男から伝え聞きました。

高校卒業し大学生になった今、ひとりで暮らしているだけの収入が得られるのか、結婚できるのか今も長男の頭の中に渦巻いているようです。しかし、これらの「自己実現」については障がいのあるなしに関わらず、同年代の子供たちが皆不安を持っているでしょう。私も不安です。しかし医学も進歩し補聴器やコミュニケーションをとるITアプリも日々進化しています。就労先を含め、長男に役に立つ情報はないのかアンテナを日々立てています。最後に社会のバリアについて、一例をあげてお話しさせていただきます。

私がPTA会長を務めていた北海道高等聾学校の三年間で、生徒が「認知症」について学ぶ機会が少ないことに気づきました。道内に聴力障がいをもつ高齢者を対象とした高齢者住宅ができたこともきっかけとなり「認知症サポーター養成講座」の開催を校長先生に提案し快諾してくださりました。私自身がこの事業に携わっていたこともあり、認知症の方や家族の関わりを学ぶことは、生徒たちの就労の大切な知識になると考えたからです。対象は大人だけではなく園児や小中学生も学んでいます。調べると当時聾学校での開催は国内で初めてでしたということで講師は全国の様々な対象者に講座を行っている札幌しらかば台南病院の吉岡秀典さんをお願いし、特別プログラムでアロマセラピーの講義を佐藤万里子さんが引き受けて下さいました。開催の雰囲気はスライドでご覧ください。（スライド5～8）

受講生は生徒と教職員で一五名でしたが、講師の先生が事前に生徒の聴力のレベルやどうしたらより伝わりやすいか情報を集め、生徒がこまらな方法を使使して講義を下さいました。マイクの音量もそうですが、顔や口元を見てゆっくり話す、身振り手振りを

大きく行うなどです。受講した介護福祉士を目指している女子生徒は「認知症の人としっかり目を合わせて話をする大切さが分かった。将来の仕事に生かしたい」と話していました。相手に伝えたいという講師の思いが伝わり、コミュニケーションには「相手を思いやる心」であることを、講座を通して感じました。「社会のバリア」が小さくなることは私たちの先輩の保護者のみなさんや私たちが発信してきたことでずいぶん変化してきました。皆さんもご存じのように法も動かしてきています。

長男は今、自宅から大学に通っています。聴力に障がいがある生徒は全学に二人で長男の学年は一人です。大学では情報保障の観点から様々なコミュニケーションアプリを準備してくださり、集団討議も可能になり、「物的制度的バリア」は低くなりました。一番不安だった「人のバリア」も仲の良い友達がまもなくでき、長男のできないことを助けてくれています。大学が楽しくて仕方ないと大学生活を満喫しています。

「聴力」「視力」「知的」「心身機能・発達」等に障がいがあっても、できることがたくさんあります。隠された能力もたくさんあります。しかしながら「聴力や身体に障がいがある」こと「それによる社会的不利益」はあつてはいけません。まずは子供たちの心の中に「バリア」を持たせない育て方、と教育が第1歩かなと、このテーマをいただいて改めて考える機会をいただきました。

これからもたくさんの方々を支えていただきながら長男を見守っていきます。ありがとうございます。

● 第四十二回 聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会受賞者

【北海道】 青野結花、鈴木真弓、今春己、田村寿子、金子美記、和田和子、鎌田清子、越湖眞砂美

【青森】 蛭名千鶴、平野陽子、浜中えり子

【岩手】 安部陽子

【秋田】 田中友木子

【福島】 小沼好子

- 【茨城】 守屋教子
 【栃木】 郷野目敦子
 【群馬】 高橋とし子、春山美佐子
 【埼玉】 平綿美恵子、祐川恵美子
 【千葉】 永尾幸子
 【東京】 五日市小枝、入江恵美子、上田由美子、那須善子、篠崎結香、松下万里子
 【神奈川】 藤牧洋
 【新潟】 渋谷五月
 【山梨】 三森明美
 【石川】 岩下仁美
 【福井】 大村真子
 【長野】 市川貴子、内田貞子、丸山布佐子、梅原文江、塩川志奈子、大澤裕子、北原厚子
 【岐阜】 神田仁美、戸田陽子
 【静岡】 佐藤安世
 【愛知】 伊藤伊津子
 【大阪】 黒川久美子
 【兵庫】 石田とみ江、岩元清美、前川佳江
 【岡山】 秋山美佐子
 【佐賀】 池田良子
 【熊本】 池田洋子
 【宮崎】 戸高朋子
 【鹿児島】 堀之内眞由美

●全国聾学校作文コンクール審査講評

審査委員長 齋藤佐和

全国聾学校作文コンクールは第十五回の節目を迎え、本日、佳子内親王殿下の御臨席を賜り、表彰式ならびに入賞作品の発表が行われますことは誠に光栄なことであり、深く感謝申し上げます。今回は、三十二校から一六一編が集まり、入賞十五編、努力賞九編、佳作十五編が決定しました。日記部門には一七編の作品が寄せられ、四編を入選として作品集に掲載しました。本コンクールのテーマは「自然や人とのつながりの中で自分に焦点をあてたもの」ですが、今年も様々な題材を扱った作品を通して子どもたちの興味関心の変化

と書く力の成長を読み取ることができました。

絵日記入選作は、絵の表現と言葉による表現が相まって、心に残る経験をしっかりと伝えていく楽しい作品でした。日記入選作二編は、たまたま料理への挑戦や料理のお手伝いという題材でしたが、動作や材料の様子、におい、味など、さらに自分の気持ちも表現している豊かな作品でした。作文の土台となる力が十分育っていることを感じます。絵日記、日記は聾学校の言語教育の一つとして、これからも大切に扱っていききたいと思っています。

小学部の作文は、家族のこと、学校での経験、校外学習などが題材になり、その中で成長を感じさせる作品が多かったのですが、香山侑輝さんの「空（くう）ちゃん」は、家族同様に思ってきた犬の死に直面して、一緒に育った幼児期のエピソードを自分の記憶と家族の話から綴っている作品でした。目の前の現実と過ぎた時間の思い出を書き分けている優れた描写力が評価され、金賞、聴覚障害者教育福祉協会会長賞を受賞しました。

中学部では職場体験、宿泊学習など経験の幅が広がってきますが、経験を辿るだけでなく客観的な見方も表現できるようになってきます。白澤拓磨さんの「環境がもたらすもの」は、実習先の図書館での貴重な経験から、自分にとって必要な環境とは何かを客観性をもって分析しています。これから出会う様々な環境で自分に必要な選択をしていこうという作者の決意が伝わる優れた作文であり、金賞、全国聾学校校長会賞を受賞しました。

高等部では社会性のあるテーマをとりあげる作品も増える一方、自己のアイデンティティや家族への思いを深く見つめる作品も多く、自立の時を間近に感じている青年期らしさを感じます。野口愛莉さんの「不器用な父、不器用な私」は、幼児期から次第に変わってきた父親への複雑な思いを経て、社会を背負った父親の思いを受け入れていく作者の成長が伝わります。愛情の多様な表し方を丁寧に書いた作品として高い評価を受け、金賞、文部科学大臣賞を受賞しました。

毎年、入選作品集と応募全作品の分析結果をまとめた小冊子を、毎年、全国各聾学校に還元しています。

それらを通じて、本コンクールがこれからも聾学校の子どもたちの書く意欲、書く力の育成につながり、また日本語の力を育てる聴覚障害教育の専門性の継承に貢献できることを強く願って、審査講評を終わります。

作文コンクール金賞受賞者表彰式



作文コンクール
金賞受賞者
(写真左から)
野口愛莉さん
白澤拓磨さん
香山侑輝さん

全国聾学校作文コンクール文部科学大臣賞受章作品発表

不器用な父、不器用な私

栃木県立聾学校

高等部三年 野口 愛莉

私は昔、父が嫌いだった。

父は特別厳しいというわけではないが、とても真面目で、慎重で、あまり感情を表に出さない人だ。また、元々声が大きいので、よく周りから怒っていると勘違いされる。そして、家族の中で唯一父だけ手話ができない。

家族の中で私以外は健聴者だ。母と妹は手話ができるため、手話と口話を使いながら会話をしてくれる。しかし、父は手話がほとんどできない。正確には手話を使わないため、父との会話は口話のみだ。私と父の会話では、私が聞き取れないことがあった場合、それを察した父が会話をやめてしまうことが多々あった。そのため、友達がお父さんと手話で会話をしているのを見ると羨ましかった。また、よく

父と話をしている妹も羨ましかった。母と妹とばかり話している父を見て、「私は父に嫌われているのかな。」と本気で悩んだ。

たくさん悩んでいくうちに、だんだん私は父と話すことをやめてしまった。そして、無意識のうちに私は父との間に壁を作っていた。無感情で威圧的、私と会話をしてくれない、手話も覚えてくれない。その積み重ねからいつしか私は父を嫌いになっていった。父が帰ってきた時、「ただいま」と声をかけてくれても返事をしない。朝、父が起きてきた時も挨拶をしないなど、小さな積み重ねから私と父が一言も喋らない日がどんどん増えていった。

そんなある日、母と世間話している時、話の流れから何気なく私は母に尋ねた。

「お父さんは今までに泣いたことってあるの？」

すると、考えてもいなかった意外な答えが返ってきた。

「お父さんが泣いたのは、愛莉が生まれた時かな。だけどそれ以外は見たことがない。」

「父は泣いたことがあるんだ、しかもそれが私の生まれた時だなんて。」と驚いた。父は私のことを嫌いではなかったのだとこの時初めて気が付いた。

また、私は母に父が手話をやらない理由を尋ねた。

「なんでお父さんは手話をやらないの？」

「それはね、家族に一人は手話ができない人がいないと、将来社会に出て、他の人とコミュニケーションを取る時に大変になるからなんだって。」

父は私と話をしたくないのでも、手話を覚えるのが嫌なのでもなく、私のことを考え、そういう選択をあえてしてくれていたのだ。なぜ私は父が私を嫌っているかと勝手に考え、父を嫌いになっていったのだろう。例えば、父は私が小学生のとき、家庭科で作った父の日のプレゼントのハンカチを今でも使ってくれている。私が中学生のとき、妹とお金を出し合いプレゼントした服を今でも着ている。また、母と妹が留守の時、父は二人に内緒で遊園地に連れて行ってくれ、日が沈むまで一緒に遊んでくれた。嫌いだと思っていた時には思い出せなかった思い出がその一瞬であふれ出した。

学校では毎月一回文化活動があり、私は絵手紙を

選択している。ある時、「勤労感謝の日に働いてくれている家族に絵手紙を描こう」というお題が出た。すぐに頭に父の顔が浮かんだ。大きい紙に、鮮やかな紅葉と今まで素直に言えなかった父への感謝の思いを言葉にして書き表した。それを何と言われるか少し緊張しながら父に手渡した。すると、父は私の絵手紙を見てすごく喜んでくれた。絵がすごく上手だと褒めてくれた。また、後から母に聞いた話だが、大きい紙が入る額縁がないか探してくれていたらしい。それを聞き、私は胸がいっぱいになった。「やっぱり私は父に嫌われていない。愛されている。」確信に変わった瞬間だった。それからの私は、父に素直に接することができるようになった。笑顔で会話をすることができるようになった。

父は不器用だ。だけど不器用なりに私や妹を平等に愛してくれている。真面目でとても慎重派だけれど、その分家族で遊びに行く時は計画をたくさん練って、私たちを楽しませてくれる。顔には出さないが、家族という時は父も心から楽しいと思ってくれているのだろう。家族のことを第一に考え、行動する。そんな不器用だが優しい父が私は大好きだ。

● 桜内義雄賞受賞者

お母さんと私

千葉県

植野圭哉



軍人一家に囲まれて育った母は天衣無縫な箱入り娘でもあった。父も軍人であり、母の兄の親友で幼年学校での同期生であった。母は、父の生い立ちを『しろばんば(井上靖著)』のよう……と話しながら読書を勧められた。このとき私は小学四年生であった。

本籍は和歌山であるが、私が一歳になる前に聞こえ

ないことを知ると、和歌山の祖母から実家の近くのろう学校を勧められるが、医師の勧めで両親は千葉への転居を決断。

転居先は、「野菊の墓」(伊藤左千夫著)で知られる、自然豊かな里山の多い矢切の地であった。父は早朝より仕事に出かけ、夜遅く帰宅するという毎日であった。

昭和三十二年に入学したろう学校(当時の東京教育大学附属盲学校)は、「旧兵舎」の校舎で、ジブリ映画を彷彿とさせるメルヘンの世界であった。母校を卒業するまでの十六年間は口話法で厳しい指導を受けた記憶はあまりなく、むしろのびのびとした環境で育てられた。母は、外での出来事などすべてを私に伝えてくれた。母は、物真似やパントマイムもうまく、ドラマのように面白かった。小説や映画、漫画に興味を持ったのも母のおかげでもある。

三年間の寄宿舎生活も経験し、寄宿舎では男子寮長や全寮長に祭り上げられた。高等部ではクラブ活動委員長や生徒会長も経験することとなった。

このような学校生活を経て、大学を卒業後は千葉市役所に技術職として三十年間奉職。社会は苦行であったが、測量から設計、現場監督、苦情処理担当等と、一通りの仕事を経験することができ、大学時代よりも多くを学ぶことができ、私の人生の大きな財産となった。また、私の設計した花壇が全国緑化フェアでは知事賞を受賞するなど努力が形となったときもあった。

聴覚障害当事者活動として続けてきた千葉県のろう者協会の社会福祉法人格取得を機に、市役所を退職。初代理事長・施設長に就任、当初は十数名の職員からスタートし、現在百十名の職員を擁する団体に成長した。

企業戦士や経営者でもあった父が、ある日突然私の職場に姿を現し「分かりにくい職場だ」と一喝されたことは、今でも強烈な記憶として残っている。非常に威厳のある父であった。父の背中にはあまりにも大きかった。

母は、母の姉(河野愛子)が短歌の歌人であったことから短歌もたしなみ、茶道の師範にもなるなど、

芸術・文化の世界にも深いこだわりがあった。そんな母から影響を受けたせいか、演劇の道に入り、千葉ろろ者劇団九十九を立ち上げ、演出や脚本づくりなども手掛けることとなった。国民文化祭に出演参加二回、世界ろろ者演劇祭典（ヘルシンキ）にも日本代表（日舞手話劇「釣女」）として参加、モスクワに海外公演など、映像制作も手掛け現在に至っている。両親はとても信仰深く、必ず神社やお寺に参拝していた姿が今でも目に焼き付いている。

今は折り返し点だと思いつつ継続は力なりと気持ち新たにしております。皆さんの支えを今後ともどうぞよろしくお願いします。

年度当初の会長ご挨拶

公益財団法人聴覚障害者教育福祉協会会長

参議院議員 山東昭子



会長
山東昭子

令和も二年を迎えました。ひとことご挨拶申し上げます。

本協会は昭和六年の創立

以来八十九年目を迎えました。今年度も益々事業の充実を目指して努力してまいりますので、皆様のご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

さて、昨年度の第四十二回「聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会」は、令和二年一月二十七日（月）に実施いたしました。公務ご多忙な中を、十二年続けて秋篠宮妃殿下のご臨席とお言葉を賜ってまいりましたが、今回は佳子内親王殿下のご臨席とお言葉を賜りました。誠に光栄に思いますとともに、深く感謝いたすところでございます。

全国の聾学校・聴覚特別支援学校の教育の充実発展と幼児・児童・生徒を励ますことを願って実施しております。

す全国聾学校絵画展、全国聾学校作文コンクール、全国聾学校合奏コンクールは、それぞれ立派な成果と成績を上げることができました。また、児童生徒の基礎的な言語力の基盤づくりをねらった「読字力検定」試験への受験も、活発になってきています。

これ以外の事業としては、公益財団法人JKA競輪公益資金の補助事業であるFM補聴システムの無償貸与事業を実施しました。

このように昨年度も、協会の各事業の実施と運営に、皆様方の多大なご理解とご協力を賜りました。誠に有難うございました。今年度の各事業実施につきましても、皆様方の一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

●全国聾学校合奏コンクール審査結果

金賞・文部科学大臣賞

・東京都立葛飾ろう学校

小学部 九名

「カントリー・ヴァリエーションズ」

銀賞

・大阪府立生野聴覚支援学校

小学部 十三名

「エーデルワイス」

銅賞

・東京都立大塚ろう学校

小学部六年 十一名

「Stand Alone」

努力賞

・東京都立大塚ろう学校

小学部五年 十七名

「いのちの歌」

・香川県立聾学校

中学部 六名

「情熱大陸」～鳴り響く思い～

・筑波大学附属聴覚特別支援学校

小学部四年 十二名

「小さな世界」

審査員奨励賞

・東京都立大塚ろう学校

小学部四年 十四名

「生命の息吹」

・東京都立中央ろう学校

高等部 十四名

「西郷どん」

・福島県立聴覚支援学校会津校

小学部 二名

「どれみのうた」

・静岡県立静岡聴覚特別支援学校

中学部 九名

「天鼓」

・大阪府立生野聴覚支援学校

小学部 十五名

「風になりたい」

・筑波大学附属聴覚特別支援学校

小学部六年 十二名

「ドラムマーチ」

全国聾学校合奏コンクール第二次審査総評

審査委員長 尾崎正峰

全国聾学校合奏コンクール第一次審査を通過した八校十二グループを対象として、第二次審査が行われました。

アンサンブルの基本ともいえる二人のグループもあれば、十七人という大人数のグループまであるなど多彩であり、そして、楽器の編成もますますヴァリエーティに富むものとなってきました。

各学校・グループの演奏の様子もまた、終始樂しげに演奏しているもの、落ち着いて堂々としているもの、最初は緊張していたものの次第にほぐれてきて熱気あふれる演奏となったもの、演奏と共に振付にも工夫したものなど多様でしたが、そのいずれもが、児童・生徒さんと先生とが心を一つにして音楽を紡ぎ出していることが映像からひしひしと伝わってくるものでした。

第二次審査に向けてみなさん練習を積み重ねられたのでしよう。どの演奏も第一次審査の段階から改善され、磨きがかかったものでした。以前から演奏上の課題として指摘されていた「リズムをみんなで作る」ということや「楽器間のバランスを考えること」などをクリアしているグループが多くなってきたことは評価されます。また、第一次審査での審査員による講評をしっかりと受けとめてもらえたと思われる演奏も多く、審査員として嬉しい手応えを感じることができました。

加えて、演奏技術の基礎的な部分をしっかりと練

習、習得していることがうかがえるようになりまし
た。先生方のご指導の賜といえますが、専門家のア
ドヴァイスを受ける機会があれば、だれもが一層向
上することでしょう。

全体を通してみれば、一人ひとりの特性に応じた
パート割りや編曲、各学校・グループの独自性を表
現するためのいろいろな工夫など、毎年のことなが
ら、先生方のご苦労がしのべられました。そして、こ
のコンクール参加にあたっては、学校関係者をはじ
めとして、さまざまな立場の方々からのサポートが
あったものと推察いたします。多くの方々の思いの
結晶としての演奏は何物にも代えがたいものだと思
います。

今年度の審査を振り返ったとき「参加することに
意義がある」とのフレーズが頭に浮かびました。こ
のフレーズは、ロンドンオリンピック大会（第四回、
1908）の陸上競技でアメリカとイギリスとが激しく
対立していたことをいさめるため、セントポール大
寺院で行われたミサでのタルボット大司教の説教の
中の言葉ですが、これに感銘を受けた近代オリンピッ
クの父であるクーベルタンが演説で引用したこと
で現在まで広く知られるようになりました。クーベル
タンの演説では、このフレーズに続けて、自らの言
葉として「人生において重要なことは、成功するこ
とではなく、努力することである。本質的なことは、
勝ったかどうかではなく、よく戦ったかどうかにあ
る」と述べています。また、彼は、スポーツと芸術
文化を通して人と人とが交わることによってよりよ
い平和な社会を創っていくことを目指していました。

スポーツと音楽の違いはありますが、一人ひとりが
真剣に取り組むこと、人と人とがつながることの
価値は共通しており、そうした営みが生み出すであ
ろうすばらしさを思い描きながら、次回のコンクー
ルへの参加に向けて取り組んでください。これまで
に培われてきた経験を大切にすると共に、これまで
以上にそれぞれの持ち味が表れたすばらしい演奏が
聴けることを期待しています。もちろん、新たにチャ
レンジする仲間も大歓迎です。

全国聾学校合奏コンクール表彰式

第三十一回全国聾学校合奏コンクール表彰式は、令和
二年二月二十七日（木）東京都立葛飾ろう学校体育館で
行われる予定でしたが、その時点で新型コロナウイルス
の感染状況から判断し中止といたしました。山東昭子
会長の出席のもとに表彰が行われる予定でしたので大変
残念です。受賞した葛飾ろう学校小学部の皆さん、来年
度も頑張ってください。

ハマナス募金

当協会でも実施しております事業は、公益財団法人JKA
競輪公益資金の補助をはじめとして、皆様方からのご
寄附（ハマナス募金）により実施しています。

皆様方のご理解とご支援に深く感謝いたしております。
今年度も計画事業の適正な実施に努めているところで
ございますが、昨今の社会情勢から事業資金の確保が大
変厳しい状況にあります。つきましては、皆様方より一
層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

ハマナス募金のお振込みは、郵便振替もしくは銀行振
込にてお願いいたします。

郵便振替口座 00110・9・134877

名義 聴覚障害者教育福祉協会

銀行振込 みずほ銀行江戸川橋支店

普通口座 1615748

名義 公益財団法人聴覚障害者教育福祉協会

会長 山東昭子

当協会は、平成二十九年三月三十日内閣府（内閣総理大
臣）より税額控除に係る証明を受理しております。

令和元年十月一日から令和二年三月末日までの間に、
次の皆様方よりご寄附をお寄せいただきました。誠に有
難うございました。

（敬称略）

伏見殿下杯チャリティゴルフ実行委員会事務局、群馬県
聴覚障害者親の会、小林明、中村喜久子、石川庄六、（株）
ATOMIC（山勝彦）、春名英徳、辻村哲夫、大前久夫、
堀信子、武田ビル（株）（武田智彦）、河村美津子、若宮幾馬、
鄭仁豪、安達スミ子、金子昌夫、（株）テアトルアカデミー
（浅井健二）、東京ホールディングス（浅井健二）、佐藤
和子、武田千枝子、株式会社PM・Japan（加藤聖
治）、齋藤佐和、溝口昭義、丸茂明子、石油連盟、神邊
洋吾、桑原純子、青野雅子、倉田正雄、（株）宝古堂美
術（山田春雄）、岡部忠信、野口敦子、浦川絢子、荒崎
勝美、六車郁子、藤本登、日高清子、神邊洋吾、村田正彦、
高田愛子、斎藤捷彦、リオン株式会社、千葉いのはな会、
（株）アイ・エーインベストメント（浅井健二）、谷口昭
子、仲田邦男、鴻友会

令和元年度

公益財団法人JKA競輪公益

資金による補助事業実施報告

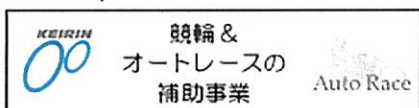
一、事業名

令和元年度障害のある人が幸せに暮らせ
る社会を創る活動補助事業

二、事業実施内容

FM補聴システムへの購入・無償貸与
送信機・受信機二十四セットを

全国聾学校・聴覚特別支援学校、小学校、
中学校、難聴幼児通園施設に在籍、在園
する幼児・児童・生徒の家庭に貸与



令和元年度 読字力検定試験について

令和元年度の読字力検定は、第一回目は受験者が一〇二二名、合格者は四八一名。第二回目は受験者が一〇二二名、合格者は三七三名。第三回目は受験者が九二五名、合格者は二四七名でした。今年度の総計は、二九六九名の受験者、合格者は一一〇一名でした。参加学校の数は、五七校でした。

今年度の答案を見てみると濁点・促音のまちがいが、やはり目立ちました。また、正解ではないのですが、漢字の意味をしっかりと考えて解答している子どもや、漢字を見て意味を知っているけど、読み仮名があいまいな生徒の回答など惜しいものも沢山ありました。児童生徒の頑張りや努力がよくみられる結果でした。

これから、ますます生活の中でインターネットを活用し、情報を得る時代になってきました。その際に、漢字がしっかりと読めて文字を打ち込めないとその情報が得られません。漢字を読むことがますます重要になってきているように思います。

トピックス

令和元年度

聴覚障害教育振興奨励賞受賞校

聴覚障害教育振興奨励会

事務局長 井口 昭

去る三月一日、令和元年度の受賞校の二校が聴覚障害教育振興奨励会（会長 渡邉 研）から発表された。

① 静岡県立沼津聴覚特別支援学校

研究実践報告者 講師 今澤和子

◎研究テーマ

共感関係を育む保護者支援を目指して

～乳幼児教室の支援内容の整理・見直し～

研究・実践の内容

① 過去からの実践記録の整理（グループ保育、育児日記、育児講座など）

② 長年にわたる研究テーマである「共感関係を育む遊び」の考え方をまとめた。

母子遊びに於て大人の関わり方をステップアップしていくことで共感関係やコミュニケーション能力が豊かになることを狙いとした。

③ 「乳幼児発達段階表」の作成（幼稚園の前段階を五領域に分け、乳幼児期を三期に分けて発達の目安表を作成した。）

④ 「子供が喜んだ遊び集」の作成

② 京都府立聾学校

研究実践報告者 校長 芦田雅哉 他

◎研究テーマ

言語獲得から言語運用へ

～聴覚障害児者の言語運用力を育てるために～

研究・実践の内容

近年の聴覚障害教育は通常校に通う児童の増加、人工内耳装用児童の増加、早期からの手話の導入、高等部の進路指導の多様化、就業活動等に対応する言語指導の在り方が求められている。

当研究チーム（シンポジウム）では以下のテーマを設定しそれぞれの発達段階に即した事例研究をまとめている。

① 聾学校小学部段階での言語運用 小川征利

② 難聴中学生の言語運用への支援 白井一夫

③ 高等部での進路指導を通じて感じた言語運用力

柳田智子

編集後記

会報「響き」七十七号をお届けします。主に令和元年度後半の事業についてお伝えします。

第四十二回「聴覚障害児を育てたお母さんたちをたえる会」は、一月二十七日に開催いたしました。

一月の開催となると例年寒さや降雪の心配があるのですが、何とか降雪は免れ主催者としては安堵いたしました。今年は佳子内親王殿下が初めて一人でご臨席賜り、お言葉もいただきました。また、佳子様と表彰された方々やそのご家族とが一緒に集合写真を撮影して関係者に配布いたしました。

全国聾学校合奏コンクールの金賞は、今年京都立葛飾ろう学校が受賞しました。表彰式は令和二年二月二十七日に、今回も山東昭子協会会長が受賞校の都立葛飾ろう学校での表彰式に出席して文部科学大臣賞を授与する予定だったのですが、新型コロナウイルス感染の状況を鑑み、やむなく中止といたしました。大変残念です。

令和二年度の協会事業においては、「聴覚障害児を育てたお母さんたちをたえる会」をはじめとして例年通りの事業をより充実した形で実施いたします。そのために、全国の聾学校、関係機関、関係団体等のご理解ご協力、ご支援を賜りますよう、事務局一同、心よりお願い申し上げます。

列島を何度も襲った台風の被害、世界中を巻き込んだ新型コロナウイルスの感染など、また私たちの生活を脅かす状況が続いています。災害の無い安心して生活できる日々の到来が待ち望まれます。